

2012年9月の今西礼子講師の講演要旨

2012/10/21

この講演要旨は、ほあ一の会の関 聡美さんがまとめてくださいました。

2012.9.10 ほあ一の会

「生命の輝く瞬間を求めて」 今西礼子さん

●セドナとの出会い

初めてアメリカのセドナに行ったのは1997年ですが、当時セドナは知られていませんでした。『世界のパワースポット』という本を書くにあたって、周囲は「セドナという名前を初めて聞きました」という反応でしたが、それからしばらくたって、一部の方の中で有名になってきました。

セドナに行ったきっかけは、1996年に見た夢です。ネイティブアメリカンと思われる年配の白髪女性が、夢の中であたたかい笑顔で笑いかけてくれたのですが、目覚めて「サンタフェに行って、あの女性に会いたいな」と思いました。そして、セドナが特別な場所であると書かれた本を読んで、ホテルの予約だけして出かけていきました。

今だといろんなガイドブックも出版されていますし、メディアでも取り上げられていますが、当時は何か特別な場所らしいというだけで、実際に入ってから地元の人にいろいろ話を聞いて情報を知ったのです。

セドナはフェニックスからシャトルバスで二時間、最初に行ったときは着いたときは夜でした。シャトルバスから降りると空気が軽かったのを思い出します。

セドナに行くと、大地がわたしに語りかけてくれました。岩を見て涙が出てきました。「これは一体何だろう」とびっくりしました。今まで触れたことがない何か、地球の慈愛そのものに、セドナで初めて出会いました。

セドナは聖地なのですが、国立公園ではありません。私有地と国有化が混在しており、いかにありのままに残すかが課題です。パワースポットなので、いろんなものを引き寄せます。美しい土地なので、最近はそこに定住する人もいますし、ニューエイジムーブが起こり、スピリチュアルキャピタルともいわれています。

● レイチェルズ・ノールの体験

セドナほどヴォルテックスが密集している場所は世界にないように思います。ヴォルテックスとはエネルギーが突出している場所ですが、大小あわせると二百もあります。

ある日ヴォルテックスに行ったとき、声が聞こえてきました。自分の頭で考えた言葉と思うには、あまりにも深遠な言葉でした。

後日、ネイティブ・アメリカンの本を読んで、自然は話しかけてくれること、ハートがオープンで感謝しているとき、大地と一体となって声が聞こえてくることを知りました。月の出を待っている時など、いろいろな声・叡智のようなものが、インスピレーションの形で沸き起こってきて、「自然は先生だ」と身をもって体験したのです。

セドナの中のレイチェルズ・ノールは、とりわけワンネスの生命を感じる場所でした。レイチェルさんは、お金で気に入った土地を買い、ネイティブ・インディアンが祈りを捧げてきたその場所を、私有地にはせず一般に公開していました。

レイチェル・ノールズでたたずんでいたとき、木々や岩と一つになって、自分の存在がどこまでも広がっていく感覚を初めて得ました。「一体私が体験しているのは何だろう」と思いました。スピリチュアルにはもともと興味があったのですが、この一体感がワンネスだな、と言葉に自然に出てきました。

レイチェルズ・ノールは平和のためのコンサートが行われたり、とても好きな場所でした。しかし、レイチェルさんが亡くなった後、息子さんがその土地を売ってしまいました。反対運動や募金活動が行われたのですが、結局土地は開発されてリゾートホテルやゴルフ場になり、立ち入ることができなくなってしまいました。

「この美しい場所に、人間はどうして手を加えて開発するのか」と、自分のからだを切り刻まれるような苦痛を感じて、わたしは体調が悪くなるほどでした。

セドナの美しさを伝えるために写真を撮って、土地開発問題のために自分ができることをしようと思いました。写真だけでは足りず、言葉も書きたいと思いました。

帰国後は、咳が二ヶ月止まらず、薬も効かず眠れない日々が続きました。原因不明で死んでしまうのかと思ったほどですが、セドナがどうしても忘れられず、通い続けました。

メディスン・マンにお会いしたとき、リゾートホテルが建っている場所がヴォルテックスだと聞きました。工事の人が夜片付けて仕事を終えても、朝来ると工事道具がバラバラになっている。そんなことが続いたそうです。また、工事現場からきれいに埋葬されている人骨が出てきました。メディスン・マンが儀式をしてその場のスピリットと交信し、「ここはネイティブ・アメリカンの聖地だ」と伝えました。「ネイティブ・アメリカンはスポーツが好きなので、出てきた人骨をテニスコートの下に埋めてください」というスピリットの言葉が伝えられました。そして、やがて「建設

を許可しましょう」と言う言葉がおりて、不思議な現象は止まったのです。

自然の中でネイティブ・アメリカンは礼拝します。ここが聖地で礼拝の場所だと言っても、「建物がないのでここが礼拝の場所という物的証拠がない」と政府は判断してしまいます。目に見えないものを受け入れるむずかしさを垣間見しました。

そして、そういうむずかしい状況と戦うのではなく受け入れることを知りました。受け入れるのが敗北ではないのです。現実を受け入れる勇気と強さ、受け入れてなお何が最善なのか、前に進むことが一番の強さだと、悲しいですが納得しました。

● ワンネスを感じる

セドナには、女性性の感じられる場所と男性性の力強さを引き出す場所に分かれていたり、混在していたりします。また、ある場所では、この場が女性性・男性性のバランスが取れていると感じられます。

セドナの大地は、何かになろうとする必要がないことを教えてくれました。わたしたちは「立派な人になりなさい」と言われて大きくなるのですが、力を抜いてリラックスし、素の自分があらわれてくると、他との分離感が消えます。そういう時は、自分の存在が森羅万象の一つにながっていることを知るときでもあります。

地球のエネルギーは母性に満ちています。岩がやさしさに満ちています。セドナでは、ある地点の木が大きくなりながら成長していますが、地球のエネルギーが突出してくると、木がうねります。また、雲が突然あらわれたり、大自然のドラマを目撃できます。

セドナでは、三年くらい住んで十分だという人と、そのまま住み続ける人に分かれます。自分のネガティブなものとも対峙しなければならず、セドナの岩は自分の内面に眠っていたものも喚起します。人間関係でいろいろな出来事が起こったりもしますが、それは恩寵ですから、自分の中に何を感じるか、浮き上がってきたものをよく見てみると面白いのではないのでしょうか。

「ワンネスを体験するにはこの瞬間に自分がいることが必要」とは、レナード・ジェイコブソンさんの本で教えてもらいました。セドナの大自然から戻ってくると、日常で生きるのがたいへんになったこともあります。しかし、セドナにいなくても、日本の自宅にいても愛に満ちてワンネスを体験できるのです。レナードの本には、この瞬間にいるためのメソッドが書いてあり、セドナにいなくても、地球が持っている恩恵が味わえると知りました。

● 本当の自分とは？

本当の自分とは何なのでしょう。本来これが自分だと思っている「自分」は、本当の自分では

ありません。この世で生きやすくするためにエゴが出現したのですが、エゴはエゴの立場を守っているために、本当のわたしたちは眠っています。しかし、ワンネスの存在の自分は不滅の状態なのです。

わたしたちは、物質的な満足や、仕事の達成感など精神的な満足度を求めて生きています。

わたしもスピリチュアルを学んでも、マインドの世界に生きていました。

マインドとは、考えるときはいつでもついてくる蜘蛛の糸のようなものです。人生のほとんどをマインドの世界で生きている人も多いのですが、過去と未来から自由になり、実在へ向かうと「本当の自分」と出会います。

自分の思考を離れたことで、わたしは「本当の自分」と出会いました。では、今まで生きてきた自分は何だったのでしょうか。

ジム・ドリーバーは『あなたのストーリーを棄てなさい。あなたの人生が始まる』という本を書いています。自分のストーリーがどう限界を作り出したのかがテーマです。この本は、ストーリーにフォーカスしているのでわかりやすいです。

「自分は誰であるのか。あなたは自分のストーリー、マインド、肉体、思考、感覚ではない。なぜならあなたはそれを観察できるからだ。あなたが何であるのかというと、あなたの性質は意識そのものなのだ」

地球には約 60 億の人が存在し、その数だけマインドが存在します。60 億の小さな世界が展開していて、自分の意見と近い人とは親しく、遠い人とは仲良くできない。マインドによって、人生のあらゆることが影響されています。もし、世界平和や環境問題を心底解決したければ、本当に目覚める必要があります。

インドの聖女 Amma は、「あなたができる手伝いはしなさい。しかし、人々を助けると同時に、あなたが目覚めることがいちばん必要です」と言っています。

わたし自身も悟らなくてもいい、修行しないと悟れないと思っていました。でも、この地上に生きるのは目覚めるためです。今まで人生で起きていることは、すべて目覚めに近づくためのものです。レナードがいうように、「人生そのものが学校」なのです。

政治、環境問題を解決するためには、ワンネスを感じてここに生きていることが一番大切なことです。マインドの中に住んでいると、ワンネスが起こりません。むずかしく考えさせてしまうのがエゴ。エゴは私たちがこの瞬間に存在することを邪魔しようとします。エゴは自分がスピリチュアルだと思っており、私たちの気をそらすためなら、何でもします。「わたしにスピリチュアルな目覚めなんて起こるわけではない」と卑下するのもエゴです。神様と自分がつながっていることに自信を持つこと。スピリチュアルであることは、戦士であることなのです。

わたしたちが成長した分だけ、エゴも賢くなりますが、秘訣はエゴに愛を贈ることです。エゴを敵だと思つと問題は解決しません。相手を理解して、愛を贈る。私たちは元々は完全な状態ですが、環境に順応せざるを得なかったのです。エゴは私たちが生きるために、守り人として出現してきました。エゴは自分が主人だと勘違いしています。自分の状況からあるストーリーを作り出し、「これがうまくいかないと幸せになれない」と思い込んでいます。わたしも思い込みをやめたら、セドナが日常に出現してきました。

「わたしたちは輝く意識です。ストーリーではない」

自分の状況、自分のものの見方・受け答え方が変わり、自分が愛に満ち溢れるとまわりも変わってきます。

「行動すべてに愛を注ぐと、それが本当の祈りとなる」

マインドから生じた愛は、いつも見返りを求めています。何かを求めて、というのがマインドです。本当のマスターであれば、愛に溢れているのですから。

●まずわたしたちが目覚めること

現在の状況は悲惨に見えますが、地球にも愛を注げば大丈夫です。愛は源であり、奇跡を起こすのだと思います。究極的には愛しかない。マインドの愛ではなく、本当の愛しか存在しません。そして別々の人間でも、一つの意識としてつながっています。

意識は一つしかありませんから、シンクロも起こります。一人ひとりが目覚めれば社会が良くなるというのは、納得できる理論です。行動を起こすのも大切ですが、今この瞬間に目覚めるということが、社会に貢献することです。

古い魂ほど困難な状況に出会います。それは自分で乗り切ることができるから。神様はわたしたちよりもわたしたちをご存知で、目覚めのための状況を絶妙なタイミングでつくってくれます。ストレスを感じ、幸せでない状況は、現状をありのままに受け入れられない状態です。あるものはあり、ないものはない。ないものを求めると、あるものを逸してしまいます。それはエゴのトリックで、今ここにあるものを、感謝して受け取ることも忘れてしまいます。結果を求めない、執着しない。期待しない。状況がベストでなくても自分を脅かさないことです。過去も未来も一切ありません。過去のストーリーをなくすことが、この瞬間に生きるということです。

セドナの厳しい条件でも、いきいきと植物が生きており、生命の輝きが目をひきます。一見枯れているように見える植物も生きているのです。たとえ、いまあなたの体調が悪くても、状況の一つとして認めこの瞬間にすることが、免疫力をアップさせます。

● 死を受け入れること

この瞬間に生きるための条件に、もう一つ「死を受け入れること」があります。

死の恐怖は、未知だから生まれる恐怖です。レナードさんたちスピリチュアルティーチャーは、「携帯のチップを取り替えるだけで、携帯はどこでも使えます。死は次元を変えるだけで、わたしたちは永遠に生き続けます」と言います。

わたしの父が危篤になったとき、「痛み止めを打って、安楽死を選ばれてはどうですか?」と医師に言われました。もう意識がない父でしたが、生きていて欲しかった。しかし、父の苦しみはわたしたちの想像を超えたと思ったので、書類に泣く泣くサインをしました。しかし、薬を点滴に入れようとした瞬間、もう意識がないと思っていた父が「それはあぶない」と薬を止めたのです。

インドの聖人 AMMA も来日されたとき、「安楽死は避けるべきです。思い出の曲を聴くと、意識がないと思われていた人も涙を流すことがあります。最期まで生はまっとうされるべきです。次元が変わるだけで、意識が減びることはありません」とおっしゃいました。生命はぎりぎりまでこの瞬間に生きる、と父が最後に教えてくれたのだと思います。

残される者は悲しみ嘆きますが、死に行くひとは苦しいように見えても、今次元が変わるとき、目覚めと至福に満ちています。この肉体の終わりは、次元を変えただけのことです。

誰もがこの世を去ります。アーチャーという仏教の師が、美しい杯を見せて、「これはすでに壊れている」と言いました。誰もがこの世を去ります。この美しい杯も永遠であることはなく、十年後、百年後、いつかはかならず壊れます。

「私はいま目の前にある杯の恩恵を楽しんでいる。それは至福だ」とアーチャー師は言います。

誰と接するときも、これが最後、一期一会という気持ちでいれば、その覚悟があればいいのではないのでしょうか。自然も変わり、肉体も死に向かっています。真実はこの瞬間にしかありません。不安になるときは、この瞬間を完全に生きていないのです。

「死を迎えるときは、過去も未来も持たず、次元を越えた旅をする。これしかないのだ」とレナードさんは言っています。

生きることは、わたしたちが死をどう迎えるのかを身につける場です。わたしたちがこの瞬間にすることが、亡くなった魂にも届きます。嘆き悲しむ期間を乗り越え、この瞬間に輝くことが、亡くなった魂たちへのいちばんの贈り物になるのです。